

宗教集団の移動と定着の過程の一側面

—ゾロアスター教徒パーシーによるノウサリ定着過程を事例として—

Migration and Settlement of a Religious Community

—with Reference to Zoroastrian Parsis Settlement to Navsari in Gujarat, India—

中別府 温和

小論は、宗教集団がある地域へ移動しそこに定着する過程でどのような事態が生じ、その事態に宗教集団およびその集団を受け入れた地域はどのように対応するのかということについて二三の論点を明らかにする。具体的には、これまでの調査が導き出した二つの事実、つまりゾロアスター教徒パーシーの祖先祭祀への強い志向と祈りに関する知識の少なさという二つの事実が、パーシーの現実の生活においてどこでどのように結びつきあっており、またその歴史的展開は史料にもとづいてどこまでたどりうるのかという問題を解明することによって本題に近づいていく。小論の問題を解明するために歴史的な方法をとる。すなわち、二つのグジャラーティ史料を使用して、パンターク（祭司の役割および祭祀分担制度）というきわめて重要な制度の実態を明確にすることによって、パーシーがインドに移動し定着した初期の段階についてのいくつかの論点を取り出しつつ、ゾロアスター教文化の研究においていまだ論究されてこなかった問題の解明を試みる。

小論が見出した新しい事実の概要は結論部分で紹介したとおりである。

キーワード：ゾロアスター教徒、祖先祭祀、祈り、系譜、集団内宗教教育

目次

I はじめに—問題と目的—

II 方法

III 系譜

1 バガサ祭司 (Bhagarsath あるいは Bhagaria) と 5 大系譜 (5 pols)

2 バガサ祭司と「4人組 (Chaharo Sath)」

IV パンターク

1 5祭司集団とパンターク

2 バガサ祭司集団とパンターク

V おわりに—今後の課題と展望—

注

引用参考文献

I はじめに一問題と目的一

ゾロアスター教徒（以下、ゾ教徒）パーシーは、新年を迎える直前の10日間の先祖供養（muktad）にその一部が表れているように¹⁾、また、聖火殿の創設および聖火を維持する儀礼（maci）が死者を供養し記念するために行われてきたという事実が示唆するように²⁾、祖先祭祀への志向を強くもっている。

また、パーシーは、祈りの調査結果の一部が示すように³⁾、祭司が宗教的儀礼をほぼ独占してきているにもかかわらず、宗教についての正確な知識は、特に祈りに関する知識は、祭司も平信徒もほとんど継承してきていない。

これらの事実は、他の事実とともに、パーシーの現実の生活において、どのように結びつきあっており、またその歴史的展開は信頼できる史資料にもとづいてどこまでたどりうるのか。これが小論が解明しようとする問題である。したがって、前者については、これまでの研究の結果をふまえてその相互関係の一部が述べられるであろうし、後者については、歴史史料にもとづいて新しい事実の提示がなされるであろう。

これまで、パーシーがインドへ移動し定着した初期の段階において、その過程の一側面を具体的史資料にもとづいて明らかにした研究はなされていない。それは一つには、その視点から記録された史料が残されていないこと、また発掘されていないこと、もう一つには、そうした問題自体がパーシーについて提起されたことがないことが主な理由である。

小論は冒頭にかかげた問題を解明することによって、そうした学術的状況を少しく前進させる糸口となることを目的としている。

II 方法

問題を解明するための基本的な方法は、パーシーのインドへの移動と定着の初期の段階の一側面を明らかにするために、ノウサリ（Navsari）におけるゾ教徒パーシー、特に、祭司系譜に属するパーシー（Mobed）、なかでもバガサ祭司系譜（Bhagarsath あるいは Bagaria）の移動と定着の一過程を取り出すことである。

ノウサリは、既に言及したように⁴⁾、ゾ教徒パーシーのインドにおける歴史的展開の拠点であった。現在でも、聖なる火の維持や祭司の資格認定などの場面で、その影響力を保持している。上述の課題の解明に不可欠の材料を提供しうる一地域である。

具体的には、グジャラーティーの史料とフィールドワークによる資料を使用して考察を試みる。
主な材料領域は、

- 1) Rustom Jamas Dastur Meherjirana 1899 *athoran ni tolani Bhagarsath vansavali* (バガサ祭司の系譜) Navsari Bhagarsath Anjuman Committee 1929
- 2) *navsarinan pak atashbeheram sahebnan navan makanne lagto ahaval tathateno avak javakno hisab* (ノウサリの聖火殿の創設に関する帳簿) Kutar Mahiar Naoroji 1929
- 3) *Navsari vadi daremeherman thayala navroni fehrest 1633-1928 A.D.* (ノウサリの聖火殿における祭司イニシエーション通過者名簿)

とする。

Ⅲ 系 譜

ノウサリのパーシーコミュニティは、祭司系譜に属する人々 (Mobed) と平信徒系譜に属する人々 (Behdin) から構成されている。自分がどちらの系譜に属するかは、明確に決定されており、パーシーは各自それをその場で正確に言うことができる。

それぞれのパーシーは過去帳 (*namgaran*) あるいは先祖の名前を書きとめた記録帳をもっていて、先祖供養の場面ではそれにもとづいて先祖の一人ずつを声に出して呼び上げて記念する。これらの記録帳と系譜は区別して論じる必要もあるので、ここでは両者をとおしてパーシーが先祖とかかわる慣習をたもってきていること、そしてそのことはパーシーの事物把握の重要な一側面であることを示唆していることに注意するにとどめよう。

1 バガサ祭司 (Bhagarsath あるいは Bhagaria) と 5 大系譜 (5 pols)

パーシーの祭司系譜は、*athoran ni tolani Bhagarsath vansavali* が明らかにするところによると⁵⁾、カムディーン・ザルトーシュト (Kamdin Zarthosht) とホーム・バーマニヤール (Hom Bahmanyar) を始祖として、前者からカーカー・パーラーン (Kaka Pahlan) とカーカー・ダンパール (Kaka Dhanpal) が、後者からアーシャー・ファレドゥーン (Asha Faredun)、マーヒヤール・ファレドゥーン (Mahiyar Faredun) とチャーンダー・ファレドゥーン (Chanda Faredun) が出自している。これらの5つの出自は、ポール (pol) と呼ばれ、14世紀の末葉から15世紀の中葉にかけてその基盤を確立した。以来、宗教儀礼を行う権利の平等な分割と分配を前提に、現在のバガリア(あるいはバガサ)祭司 (Bhagaria あるいは Bhagarsath) 系譜集団を構成する根拠となっている。5大系譜の全体は次のように構成されて、それらから派生するそれぞれの下位系譜を同定する基準を提供しているのである⁶⁾。

表1 バガサ祭司 (Bhagarsath あるいは Bhagaria) と5大系譜 (5 pols)

2 始祖	5 大系譜	上位派生系譜	下位派生系譜	
Kamdin Zarthosht	Kaka pahlan	Rana Kamdin	Pahalan Anna Shapur Chandana Mobed Bahman Asha dahaiyar Jesang Dahaiyar	
		Mobed Kamdin	Hiradada Vaccha Jesang Rana Jesang Hamajiar Jesang Mahiar Peshotan Natha Hoshang Asha Rustom Sahiar Kamdin Ram Kamdin	
	Kaka Dhanpal	Asa Lakhmidhar	Mahiar Asha Hira Narsang Nagoj Narsang Dhanpal Narsang Behram Asa	
		Bama Lakhmaidhar	Asdin Kaka Hamujiar Kaka Faredun Kaka Aspandiar Kaka Chanda Kaka	
	Hom Bahmanyar	Asha Faredun	Nargoj Asha Jesha Asha	Nargoj Asha Rustom Behram Rustom Heera Sahiyar Avva Nagoj Behman
			Vaccha Asha	Rustom Vaccha Mobed Vaccha Aspandiyar Vacc Chacha Vaccha Chaiya Vaccha
		Dosa Asha	Dhanpal Dosa Asak Dosa Sahiyar Dosa	

2 始祖	5 大系譜	上位派生系譜	下位派生系譜
	MahiarFaredn	Padam Mahiar	Nagoj Asdin Chanda Asdin
		Mobed Mahiar	Rana Adar Chanda Adar
		Rana Mahiar	Sahiar Hoshang Narsang Hoshang Chanda Hoshang Vaccha Hoshang Asha Hoshang Baiyar Hoshang
	ChandaFaredn	Mobed Chanda	Khurshed Chanda Leeba Dhanpal
		Homa Chanda	Manka Veeka Asha Veeka Chanda Veeka
		Rustom Chanda	Hamajiar Rustom Kahna Rustom Behram Rustom Pahlan Rustom Chanda Rustom Kamdin Rustom

表1がその一部を示すように、パーシーの系譜は始祖→5大系譜→上位派生集団→下位派生集団と次々に系譜をたどり、それが記録されている。パーシーは現在の自分からそれぞれの系譜を過去にさかのぼってたどり、全体の中に自身の位置を確定することができるのである。そして、自分が位置づけられる全体をたどり、その過程に刻み込まれている名前、つまり先祖を声に出して呼び起こし記念することを重要な慣習としている。1世代を30年とした場合、何十もの世代を、すなわち何百年もの時間を見通して人間のあり方を考えている一側面である。

さてしかし、パーシーの系譜を史料にもとづいて詳細にたどることはできない。

小論の問題を解明するために現時点でできることは、*athoran ni tolani Bhagarsath vansavali* と *navsarinan pak atashbeheram sahebnan navan makanne lagto ahaval tathateno avak javakno hisab* の二つの史料を使用して、バガサ祭司の動向のごく一部を復元することである。その作業に多くを期待することはできないが、小論の問題との結びつきにおいて二三の論点を見出すことはできるであろう。

二つの史料はまず次のような事実、つまり、パーシー集団内で起こった或る対立を概要といえる程度ではあるが紹介している。

2 バガサ祭司と「4人組 (Chaharo Sath)」

バガリア祭司は、ノウサリを中心に祭司活動を展開してきたが、17世紀の中葉に、かれらの活動の方針と方法をめぐってノウサリの平信徒と対立を余儀なくされた。

1672年、バガサ・アンジュマン (Bhagarsath Anjuman) は、ノウサリだけでなく、ボンベイ、チャウル、カルヤン、ビマルディ、ターナ等の地域においても、宗教儀礼を行う権利の平等な分割と分配を前提に、自分たちも宗教儀礼を行なうことを決議した。この決議に平信徒が反対し、1673年、以後各自の宗教儀礼は各自の選択した祭司によって行なうことを平信徒による集会で決議した。双方の決議とそれに基づく集団内緊張は、バガリアに2名、平信徒に6名の死者を出す対立に進展し、平信徒6名殺害の容疑で12名のバガリア祭司がスーラト (Surat) で投獄される事態をも招いた。

こうした状況のなかで、チャーンダー・ファレドゥーン出自に属していたミーノーチェヘル・ホームジ (Minocheherji Homji) が3人の息子とともにバガリア祭司から追放された。両者の緊張関係に対応して、1700年前後、メヘルジ・チャンドゥナー (Meherji Chandnakerkar・パーラーン) と4人の息子、ダーダー・チャンドゥジ (Dada Chandji アーシャー・ファレドゥーン) と7人の息子、ペーショータン・ソーラーブ (Peshotan Sohrab アーシャー・ファレドゥーン) と2人の息子がミーノーチェヘル・ホームジと行動をともにし、「4人組 (Chaharo Sath)」と称された集団を組織し、バガリアとの緊張を強めた¹⁾。

平信徒はミーノーチェヘル・ホームジに宗教儀礼を委託し、後には「4人組」に同様の委託をした。他方、バガリア祭司集団は、1732年、当時のノウサリ統治者ガンガージ・ラーオ (Gangaji Rao) とグジャラート統治者ピーラージ・ラーオ・ガエクワッド (Pilaji Rao Gaekwad) から、パンターク内における宗教儀礼の独占的かつ合法的な遂行の認可を授与された。この時点で「4人組」はバガリア祭司集団に再帰属する意思を表明し、1732年、4月16日、聖火殿 (Vadi Dar-i Mihr) において協定書の合意が成立した。

ノウサリの平信徒は、しかし、この協定書が存在するにも関わらず、再度「4人組」に宗教儀礼の遂行を委託し、受託された。この行動に対してバガリアは、ガンガージ・ラーオに嘆願書を申し入れ、「4人組」の行動を規制するよう請願した。その結果、この問題は調停裁判に展開し、「4人組」は独立した祭司集団として承認され、彼らの祭司活動のための聖火殿 (dar-i mihr) が平信徒によって創設されることが協約として有効と認められた。

この調停の受け入れ後数年を経ると、「4人組」は再びバガリアの管轄区域で宗教儀礼を行ったり、彼らを支持する平信徒の宗教儀礼を請け負うようになった。「4人組」のこの行動に対して、バガリアは聖火殿に関連する「4人組」の収益を折半するよう申し出た。バガリアの申し出は拒否され、「4人組」はバロダ (Baroda) の裁判所に対して訴訟を行なった。「4人組」はそこの評決を不服として、1740年、聖なる火とともにブルサル (Bulsar) に移動し、最終的には1742年、かれら自身の管轄区域であるウドワダ (Udvada) に定着し、聖なる火の維持

と宗教儀礼の保持に従事してきている⁸⁾。

この歴史的出来事は発生の原因をこれ以上詳細に語らないが、ここに記述したかぎりでは、この出来事に関する重要事項の一つは、対立のいずれもそれが宗教儀礼の管轄 (パンターク panthak) をめぐって起こっていることである。パンタークをめぐるとの対立は、祭司間のものであれ、祭司と平信徒の間のものであれ、殺傷、調停、訴訟などをも伴いながら、パーシーの集団内に非常に強い社会的緊張を生み出し、それはやがて聖火殿の創設まで引き起こす事態を招いた。

なぜパンタークがそのように激しい対立の要因になりえたのか。その主な理由は、パンタークの重要な機能の一つが、宗教儀礼を媒介にして祭司と平信徒を関係づけることにある。平信徒は家の竈に火を保ち、それに対して祈ったり、クスティ (khusti) やバージ (baj) をはじめとする特定の祈りを捧げることができるが、その他の宗教儀礼を行なうことはできない。例えば、聖火殿に入っても、自分で聖なる火に香木を捧げること (maci) はできない。死者を迎えて送る期間 (mukutad) においても、供え物を用意することはできるが、儀礼を行なうことができない。イニシエーション (navjot)、婚姻、葬送に関する儀礼も行なうことはできない。それらの場面で儀礼を行なうことができるのは、それぞれの場面に不可欠とされている資格を獲得している祭司だけである。

とすると、パンタークは平信徒にとっては毎日の信仰をいとなむ基盤としてあり、また祭司にとっては自分の信仰をいとなむことはいまでもなく、それをとおして宗教儀礼を行うことによって自分の社会経済的地位と役割を遂行する基盤であり、かつまたその行為を介して平信徒との信頼関係を保つ基盤でもあるのだ。こうした意味で、パンタークは、ゾロアスター教徒パーシーがその信仰を現実の生活において保持していく過程で、祭司にとっても、平信徒にとっても、重要な社会組織として制度化されてきているのである。

現在でもきわめて大切な機能を果たしているパンタークは、では当時どのような実態であったのか。ここではその実態の一側面を取り出して、問題の解明に近づきたい。

IV パンターク

1 5 祭司集団とパンターク

パーシーにおいては、祭司系譜に属する者のうちで、特定の儀礼を通過しその儀礼によって資格づけられた者だけが、ゾロアスター教の中の或る一定の宗教儀礼を行なうことができる。儀礼によって獲得された資格にもとづいて祭司は平信徒から委託された宗教儀礼を行うのであるが、その場面で機能するのがパンターク (panthak) である。例えば、パーシーは、聖火殿での儀礼を祭司に委託する場合に、書類を作成する。この書類の必要項目のなかに、先に述べた5大系譜のどれに帰属するか、とパンターク、つまり儀礼を委託する祭司名を記入するとともに、委託者の系譜をたどって何名もの人名を記入する。この場面でも、パンタークは決定しなければならない事柄とし

て位置づけられているのである。

パーシーの現実の生活において重要な意味をもちつづけてきているパンタークは、地理的な要素と系譜的な要素の二方向から決定されている。

伝承によると、15世紀の中葉に、ノウサリの属するグジャラート地域に在住するゾ教祭司たちは、次に示すように、川を境界にして地域を5分割し、それぞれの地域の宗教儀礼をサンジャーナ (Sanjana)、バガリアー (Bhagaria)、ゴダーウラー (Godavra)、バルチャー (Bharucha)、カンバータ (Khambata) の5祭司集団が分担したとする⁹⁾。

- ①サンジャーナ (Sanjana) ダントーラ (Dantora) 川からパール (Par) 川まで
- ②バガリアー (Bhagaria) パール川からターピー (Tapi) 川まで
- ③ゴダーウラー (Godavra) ターピー川からナルマーダ (Narmada) 川まで
- ④バルチャー (Bharucha) ナルマーダ川からマーヒー (Mahi) 川まで
- ⑤カンバータ (Khambata) マーヒー川からサーバルマティー (Sabarmati) 川まで

伝承はこれ以上のことを語らないので、この5分割のさらに細かな経緯とかそれにもとづく宗教活動の実態を明るみに出すことはここではできない。ただ、15世紀の中葉にはすでに、グジャラート地域のパーシー集団のなかに5つの祭司集団によるパンタークが成立していた可能性を示唆することができるだけである。そこで、パーシーがインドへ移動し定着した初期の段階に関する一側面を具体的史料にもとづいて明らかにするという小論の問題に近づくために、ノウサリにおけるパンタークの実態とそれをめぐる論点を取り出してみよう。

2 バガサ祭司集団とパンターク

(1) 5大系譜とパンターク

ノウサリにおけるパンタークに関する最も古い史料は、Ⅲ.2ですすでに述べた係争を落着かせるために、1543年、ノウサリ・アンジュマンとサンジャーナ・アンジュマンの間で合意された協定書である¹⁰⁾。ノウサリにおいては、当時すでに、バガサ祭司が宗教儀礼を平等に分担し、その申し合わせにもとづいて宗教儀礼による収益の平等の分配を実現しようとしていた。史料にもとづくと、15世紀の中葉には、5つの系譜 (ポール) による儀礼の分担が行われていたことが記録されている。その主な内容は、次に示すように、カーカー・パーラーンは、葬送場面での「三日目の儀礼」(sosh)、カーカー・ダンパールは、聖なる牛に関する儀礼 (nirangdin)、アーシャー・ファレドゥーンは、葬送場面での「三日目の儀礼」(patet)、マーヒヤール・ファレドゥーンは、祭司のイニシエーション (nawar maratab) に関する儀礼、チャーндアー・ファレドゥーンは、アンジュマンの古文書の維持管理である。この分担は、1579年、ノウサリのアンジュマンがメヘルジ・ラーナ (Meherji Rana) をインドの「第一大祭司」(Vada Dasturji) に任命するまで継続した。

- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| ①カーカー・パーラーン | 葬送場面での「三日目の儀礼」(sosh) |
| ②カーカー・ダンパール | 「聖なる牛」に関する儀礼 (nirangdin) |
| ③アーシャー・ファレドゥーン | 葬送場面での「三日目の儀礼」(patet) |
| ④マーヒヤール・ファレドゥーン | 祭司のイニシエーション (nawar maratab) |
| ⑤チャーンダー・ファレドゥーン | アンジュマンの古文書の維持管理 |

ここに記載されている儀礼や分担事項だけでパンタークが成り立っていたとは考えられない。すでにこれまでの調査が明らかにしたように、パーシーにおいては、信仰告白、清浄儀礼、聖なる火に香木をささげる儀礼、聖火殿でのジャシャン、葬送儀礼などをはじめ他にも重要とされている儀礼が数多くあり、彼らが信仰するゾ教はそうした儀礼慣習の複合として存続してきているからである¹¹⁾。

しかしながら、そうした儀礼を含めたパンタークの実態は手許にある史料によっては明らかにすることはできない。現時点では、すでに言及した二つの史料にもとづいて、ノウサリにおける5大系譜のパンタークをさらに細かく取り出していく。

(2) ノウサリにおける5大系譜のパンターク

二つの史料は上述の分担を、ナワール (navar)、ニーランギン (nirangdin)、ワラスヨジ (varasyoji)、ボイ (boi) の分担として克明に記録している。これらの4分担項目は、それぞれ祭司の資格を得るためのイニシエーション、聖なる牛 (ワラスヨジ) の尿に関する儀礼、聖なる牛、聖なる火に香木を捧げる儀礼を意味しており、葬送場面での「三日目の儀礼」(sosh と patet) を除けば、上述の分担項目とほぼ重なりあっているといえよう。

では、パンタークは現実にはどのように営まれていたのか。その運営を事実にもとづいて明確にすることによって、小論の問題との関連で、どのような論点を引き出すことができるか。これらを視角として史料が記録するところをそのまま記述してゆく

①ナワール (navar)

ナワール、つまり祭司になるためのイニシエーションの分担は、2名の祭司が行なうが、5つの系譜を出自させている最上位の2系譜カムディーン・ザルトーシュトとホーム・バーマニアールで分担される。すなわち、前者から一人、後者から一人選出されなければならないが、この選出がさらに5つの系譜で分担される。言い換えると、前者からの選出はカーカー・パーラーンとカーカー・ダンパールによって、後者からの選出はアーシャー・ファレドゥーン、マーヒヤール・ファレドゥーンとチャーンダー・ファレドゥーンによって分担が決定される。

1名 カムディーン・ザルトーシュト系譜

カーカー・パーラーンとカーカー・ダンパールで1名の選出を均等分担する

1名 ホーム・バーマニアル系譜

アーシャー・ファレドゥーン、マーヒヤール・ファレドゥーンと
チャンドー・ファレドゥーンで1名の選出を均等分担する

史料は、さらに各系譜に属する家族名とそれぞれの家族に分担が回ってくる間隔を数字で示している。ここでは、一つのナワールをカーカー・パーラーンが分担した場合には、次のナワールはカーカー・ダンパールが分担しなければならないことも明記されている¹²⁾。

②ニーランギン (nirangdin) ワラスヨジ (varasyoji)

ニーランギンとワラスヨジの分担の仕方は、ナワールと同じであるが、この場合はマーヒヤール・ファレドゥーンとアーシャー・ファレドゥーンに優先権が与えられている。

その理由は、1506年以降、マーヒヤール・ファレドゥーンがニーランギンとワラスヨジを分担してきた経緯があるからである。ただし、ワラスヨジに関しては、新しくワラスヨジが聖化 (consecrated) された1745年以来、アーシャー・ファレドゥーンにその分担が替った。

1名 カムディーン・ザルトーシュト系譜

カーカー・パーラーンとカーカー・ダンパールで1名の選出を均等分担
する

1名 ホーム・バーマニアル系譜

アーシャー・ファレドゥーン、マーヒヤール・ファレドゥーンとチャ
ンドー・ファレドゥーンで1名の選出を均等分担する

バガサ祭司集団は、このように5つの系譜(ポール)を軸とする系譜を中心にして、宗教儀礼を均等に分担し、その権益の平等な分配をめざして宗教活動を行っていく。その過程で、パンタークは、具体的には、月、日、時刻の分担をも決定し、さらにそれらに応じて儀礼の分担を決定する程度にまで達してきた。また、儀礼場面での協力および補助の仕方や交替の仕方も厳密に決定されるようになったのである。

③ボイ (boi) の儀礼

聖火殿のボイの儀礼は、それを行う資格を得ている祭司が聖なる火に香木をささげる儀礼であり、宗教儀礼のなかでもきわめて重要なものの一つである¹³⁾。この重要な儀礼に関しては、5つの系譜が一ヵ月ずつを分担する形態をとる。

しかし、9ヵ月目(アダール Adar)は、「第一大祭司」であるダストゥルジ・ソーラブジ・ルスタムジ・メヘルジラーナ (Dasturji Sohrabji Rustamji Meherjirana) の血統が分担することになっている。この9ヵ月目を除く11ヵ月が、まず上位の2系譜カムディーン・ザルトー

シュトとホーム・バーマニールで均分される。つぎに、それらの2系譜に属するそれぞれの下位系譜で均分する。

9ヵ月目(アダール Adar)を、「第一大祭司」であるダストゥルジ・ソーラブジ・ルスタムジ・メヘルジラーナ(Dasturji Sohrabji Rustamji Meherjirana)の血統が分担する

9ヵ月目を除く11ヵ月を、まず上位の2系譜カムディーン・ザルトーシュトとホーム・バーマニールで均分する。

その均分内容を、つぎに、5大系譜で均分する。

ボイの場合は、1ヵ月づつを分担する。

(3) ナウサリにおけるその他のパンタークの事例

すでに述べたように、祭司はこれらの儀礼の他に、葬送儀礼、ジャシャン(jashan)、清浄儀礼(barshnum) 婚姻、信仰告白(navjot)などの重要な儀礼を行うのであるが、それらに関連する分担についてはさらに細かく次のように決められていた¹⁴⁾。

まず、12ヵ月を2系譜カムディーン・ザルトーシュトとホーム・バーマニールで二等分する。

その結果を、ボイの儀礼の場合と同様に、それぞれの系譜に属する5つの系譜で均分する。

この仕方で12ヵ月の分担が月単位で決定されるが、それぞれを主分担者(ワラダール varadar)とする。

さらに、それらの主分担者のそれぞれに副分担者(サメワラ samewala)をつける。これらの副分担者の割り当ては、主分担者と同じ仕方で決定されるが、主分担者と副分担者の組合せは、カムディーン・ザルトーシュトとホーム・バーマニールの組合せに対応する形で決定されなければならない。

ここで、5つの系譜の一つであるアーシャー・ファレドゥーンを一事例にして、分担の実態をさらに細かくとらえていくと次のようになる。

表2 アーシャー・ファレドゥーン系譜における祭祀分担

主分担の月名	副分担の月名	主分担者名	日時の分担
アルディベヘシュト (Ardibehesht)	ファルヴァルディン (Farvardun)	ナゴージ・アシャ (Nagoji Asha)	1日目から8日目の12:00まで
アヴァン (Avan)	メーヘル (Meher)	ジェシャ・アシャ (Jesha Asha)	8日目の12:00から15日目まで
		ワッカ・アシャ (Vacca Asha)	16日目の12:00から23日目まで
		ドサ・アシャ (Dosa Asha)	23日目の12:00から30日目まで

副分担者名	姓 名	日 時 分
ナゴジ・アシャ (Nagoji Asha)	マルカール(Markar) コトワル(Kotowal)	1日目から 8日目の12:00まで
ルスタム・ベヘラム (Rustom Beheram)	コトワル(Kotwal)	8日目の12:00から 10日目の10:30まで
ルスタム・ヒーラ (Rustom Heera)	サヒヤール(Sahiyar) ハマジアル(Hamajiar)	10日目の10:30から 12日目の9:00まで
サヒヤール・アワール (Sahiyar Aval)	バーナ(Bana) カワス(Cavas) マネク(manek)	12日目の9:00から 14日目の7:30まで
ナゴジ・ベフマン (Nagoji Behman)	ソリダールナ(Solidaruna)	14日目の7:30から
ルスタム・ワッチャ (Rustom Vaccha)	ドルタバディナ(Doltabadina) チェラ(Chera)	15日まで 16日目の9:00から 17日目まで
	アンティア(Antia) バッチャ(Baccha) パドゥシャ(Padsha) ウンワラ(Unvala) ラジヤ(Rajia) ボージュル(Bhojlu) ゴバイ(Gobhai) ハティラム(Hathiram) ラシュカリ(Lashkari) ガイ(Gai) モディ(Modi) ランジ(Ranji) カドヴァ(Kadva) パダム(Padam) ショリ(Shori) カスナ(Kaesna) プラブ(Prabhu)	17日目の9:00から 18日目の12:00まで 18日目の12:00から 19日目の15:00まで 19日目の15:00から 20日目まで
モベド・ワッチャ (Mobed Vaccha)		17日目の9:00から 18日目の12:00まで
アスパンディヤール・ワッチャ (Aspandiyar Vaccha)	アダールバドナ(Adarbadna)	18日目の12:00から 19日目の15:00まで
チャッチャ・ワッチャ (Chacha Vaccha)	カトラク(Katruk) ボード(Bode) ポチャラ(Pochara)	19日目の15:00から 20日目まで
ナルサンガ・ワッチャ (Narsang Vaccha)	ゴラ(Gora) キカン(Kikan) ファタキヤ(Fatakia)	21日目から 22日目の9:00まで
チャイヤ・ワッチャ (Chaiya Vaccha)	モタ・デサイ(Mota Desai) スイルワイ(Sirvai) アワシア(Avasia) スッカ(Sukha) コトワル(Kotwal) ナガラ(Nagla)	22日目の9:00から 23日目の12:00まで
ダンパル・ドサ (Dhanpal Dosa)	ムラン(Mullan)	23日目の12:00から 25日目まで
アサーク・ドサ (Asak Dosa)	ムラン(Mullan)	26日目から 28日目の12:00まで
シヤール・ドサ (Shiyar Dosa)	ムラン(Mullan)	28日目の12:00から 30日目まで

表2の主分担者名のナゴージ・アーシャ、ジェシャ・アーシャ、ワッチャ・アシャ、ドサー・アーシャは、副分担者名のナゴージ・アーシャ、ルスタム・ベーラム、ルスタム・ヒーラ、サヒアール・アーワル、ナゴージ・ベーマン、ルスタム・ワッチャ、モーベッド・ワッチャ、アスパンディヤール・ワッチャ、チャッチャ・ワッチャ、ナルサング・ワッチャ、チャイヤ・ワッチャ、ダンパル・ドーサ、アサーク・ドーサ、シャル・ドーサの上位の系譜である。

右端の姓名は、それらの主分担者名および副分担者名から派生して、一部を除くと、現在にまで継承されてきている。

アーシャー・ファレドゥーンは、他の4つの系譜と同様に、主分担および副分担として分与された月を日時分に分割し、それらを系譜の時系列におけるヒエラルキーにしたがって厳密に分担してきていることがわかる。ここにアーシャー・ファレドゥーンの事例を記録にもとづいてそのまま引用した理由は、ノウサリのパンタークが平等均分の名目のもとにいかにより細分化されていたかをしめすことによって、この運営がパーシーの祭司にとって、特に今はバガサ祭司にとって現実的な意味をもっていたかを確認するためである。そしてまた、そうしたパンタークの現実的な運営は系譜を根拠にして行われていたという事実を確認するためである。

ところで、ノウサリにおいては、上述の分担とは異なる仕方でもパンタークは存在してきた。

(4) 信仰告白 (navjot) と葬送とパンターク

史料によると¹⁵⁾、信仰告白と葬送については、本人の父方オジ、父方オジの息子、父方オジの弟(父方オジに息子がいない場合)、本人の父の父方オジ(本人の父に兄弟がいない場合)の順に分担が決定されていた。

また、婚約している女性の信仰告白は、将来の夫の父方オジが優先して分担した。しかし、この分担の権利は、分担予定者が誰かに養子にされた場合は無効とされた。

葬送については、本人が男子の場合は、父方オジを最優先にして、上記の順番に、本人が女子の場合は夫のオジを最優先にして、上記の順番に分担を行なった。信仰告白と葬送については、すでに婚姻と養子との関連で明らかにしたように¹⁶⁾、系譜を父系にたどって考える思考が前面に出てきて、パンタークをその他とは別の仕方では支えていることがわかる。

(5) パンタークにおける祭司の代替

さて、パンタークの厳密さは、ある事情で分担が実行されないときにとられる代替措置にもその一面が表れている。パンタークにおける分担予定の系譜集団に当該祭司が欠如している場合の代替の仕方は、2系譜カムディーン・ザルトーシュトとホーム・バーマニールとそれにもとづく派生系譜集団の構造にしたがって、最も近い系譜集団から代替が確保されなければならなかった¹⁷⁾。

具体的には、カーカー・パーラーンの祭司の欠如は、カーカー・ダンパールから補充され、カー

カー・ダンパールの祭司の欠如は、カーカー・パーラーンから補充する。

カーカー・パーラーンとカーカー・ダンパールの範囲に祭司が欠如する場合は、言い換えると、系譜カムディーン・ザルトーシュトに祭司が欠如する場合は、ホーム・バーマニアル系譜のアーシャー・ファレドゥーン、マーヒヤール・ファレドゥーン、チャーンダー・ファレドゥーンから補充された。

後者の3系譜内でのそれぞれにおける祭司の欠如も、前者と同様の方法で行なわれた。また、後者における祭司の欠如は、前者のカーカー・パーラーンとカーカー・ダンパールによって代替された。

さらに、分担予定の系譜集団に当該祭司が欠如している場合には、その代替が不可欠であるが、その場面での代替の仕方も2系譜カムディーン・ザルトーシュトとホーム・バーマニアルとそれにもとづく派生系譜集団の構造にしたがって、最も近い系譜集団から代替が確保されなければならなかった。具体的には、カーカー・パーラーンの祭司の欠如は、カーカー・ダンパールから補充され、カーカー・ダンパールの祭司の欠如は、カーカー・パーラーンから補充する。カーカー・パーラーンとカーカー・ダンパールの範囲に祭司が欠如する場合は、言い換えると、系譜カムディーン・ザルトーシュトに祭司が欠如する場合は、ホーム・バーマニアル系譜のアーシャー・ファレドゥーン、マーヒヤール・ファレドゥーン、チャーンダー・ファレドゥーンから補充された。後者の3系譜内でのそれぞれにおける祭司の欠如も、前者と同様の方法で行なわれた。また、後者における祭司の欠如は、前者のカーカー・パーラーンとカーカー・ダンパールによって代替された。

このように、ノウサリのバガサ祭司集団においては、宗教儀礼の分担が平等に行われ、その結果として宗教儀礼から発生する権益が均分されることをめざしてパンタークという仕方で行われた。そのパンタークの現実の運営は系譜を第一義の根拠とし、次には少数の儀礼にかぎって父系の考え方を根拠にしていたが、その現実の運営は系譜とそれから派生する系譜集団の上位関係の範囲内で厳密に規定され、それらは一種の株のように位置づけられていた。

V おわりに—今後の課題と展望—

小論の問題は、ゾロアスター教徒パーシーの祖先祭祀と祈りに関する知識の少なさが、他の事実とともに、パーシーの現実の生活において、どのように結びつきあっており、またその歴史的展開は信頼できる史資料にもとづいてどこまでたどりうるのか、であった。

また、その問題を解明するにあたっては、方法として、パーシーがインドへ移動し定着した初期の段階において、その過程の一側面を具体的史資料にもとづいて明らかにすることをめざしていた。ここまでの論述をこれらの観点からもう一度とらえなおすことによって、小論の結びとしよう。

ゾロアスター教徒パーシーは、ゾロアスター教の教えを守りまた実践していくにあたって、いうまでもなく他の宗教集団と同じように、一人の信徒として個人でその信仰を営んでいくとともに、或る儀礼は祭司に委託する仕方でも信仰を営んでいく。彼らは、これも聖なる火の一つである竈の火の前で祈り、すでに祈りとの関連で論じたように、日常のいろいろな場面で祈り、あるいはまた聖火殿に出かけて聖なる火に香木をささげ、新年の直前の10日間は祖先の魂の迎えと送りのために伝来の慣習をまもって過ごすのである。一方でまた彼らは、信仰告白や葬送をはじめとするいわゆる人生儀礼、さらにはまた、清浄儀礼や聖火殿で行われる儀礼などを祭司に委託して行い、それらの儀礼によって彼らが理解する意味を宗教的営みのなかに見出そうとする。

そうしたパーシーの現実の生活と信仰において、平信徒にとっては、宗教の教えを知り、また祭司をとおして或る宗教儀礼を行うことによって信仰を営んでいく意味で、そして祭司にとっては、自分の信仰を営むことに加えて、自身の社会経済的な地位と権益を確保するという意味において、重要な役割をはたしてきているのがパンタークである。

パンタークは、数少ない史料が示すかぎりでは、パーシーがグジャラート地域に移動し定着した初期の段階、つまり15世紀の中葉から存在していた。そしてその史料にもとづけば、川を境界にしてグジャラート地域が5分割され、それぞれの分割地区を相異なる祭司集団が受け持ち、宗教儀礼を分担していたという重要な事実が明らかになるのである。さらに、1672-1673年にかけては、祭司集団の分担をめぐる、ノウサリの祭司集団内に緊張関係が生まれ、バガリア祭司集団と平信徒が対立し、訴訟にまで発展し、解決の困難な状況に鑑みて当時の支配者に調停を依頼したということも史料が示している。パンタークはこのように宗教的なそれ故に社会的な利害が深くかかわる事柄なのである。

そこでパンタークの実態を明確にすることによって、パーシーがインドに移動し定着した初期の段階についてのいくつかの論点を取り出されなければならない。

小論が使用した二つの史料は、パンタークの分担に関して、葬送場面での「三日目の儀礼」(sosh と patet)、祭司の資格を得るためのイニシエーション(ナワール navar)、聖なる牛(ワラスヨジ)の尿に関係する儀礼(ニーランギン nirangdin)、聖なる牛(ワラスヨジ varasyoji)、聖なる火に香木を捧げる儀礼(ボイ boi)の4つの重要な儀礼の分担を克明に記録している。これらの4分担項目を細かく見ていくと、分担の形式は分担および分担予定者の交替あるいは補充をふくめてすべて系譜にもとづいて根拠づけられており、したがって、系譜の序列(時間的な前後関係を起点とする縦の序列)に厳密にしたがって構成されていることがわかる。そして分担の内容を、月、日、時分に分けていわば再分担し合っており、系譜を原則として事柄が決定されていくのである。系譜への帰属を意識し、系譜全体のどこに自分を位置づけるかを確定しながら信仰を営んでいくことを、現実の生活のなかできわめて意味のあることとしているといえるであろう。系譜をこのようにとらえる仕方が、新年の直前に10日間にわたって死者を迎えまた送るとき(muktad)、また、聖火殿を創設するとき、あるいは聖なる火に香木をささげ

る (maci) とき、前者においては先祖の名前を過去帳にもとづいて長時間にわたって呼び起こし、後者においては、その行為を先祖の霊を記念して行うことと結びつきあっているのではないかと仮説的にいえるであろう。パーシーは、系譜をたどり、したがって先祖を強く意識しかつそれを祀り、何十もの世代、何百年もの時間を含めた視野で現実の生活を生きているのである。この視野に立ってパーシーは、聖火殿で儀礼を行なったり、そこでの儀礼を祭司に委託する場合に作成する書類の必要項目のなかに、5つの系譜のどれに帰属するか、とパンターク、つまり儀礼を委託する祭司名を記入するとともに、委託者の系譜をたどって何名もの人名を記入するのである。

さて、系譜を第一の根拠とするパンタークをめぐる考察をしている過程で、信仰告白と葬送のパンタークは父系の因子つまりここでは父方のオジが優先されて分担者になることを見出した。パーシーを対象とするこれまでの研究は、婚姻および養子慣行 (palak) において父系を中心とする思考が強く、またそれを実際に実行している事実を取り出した。婚姻および養子慣行はまさしく系譜と関連の深い事柄であるが、父系を中心とする思考という点でパンタークと相互に関連し合って、パーシーの思考と行動を色づけかつ支えているのである。

すでにくり返し述べたように、パーシーのインドへの移動と定着の初期の段階を詳細に記述することは現時点では非常に難しい。小論では、しかし、その課題に二つの史料を使用して、特にパンタークにかぎってではあったが、近づこうとした。そこでは数少ない事実しか新しく見出すことはできなかったが、これまで取り出してきた事実と結びつきあうと考えられる論点をいくつか明るみに出すことができた。

すなわち、その一つは、パーシーが祈りやその他の宗教的な知識をを十分に身につけていないことの主な理由は、集団内において祭司集団がパンタークをその重要な機軸として、宗教儀礼を独占することによって宗教的な知識を祭司集団内に保持し、集団内の宗教教育への取り組みを十分に行わなかったことである。集団内の宗教教育が不十分であることに関しては、すでに祈りの調査においても、その主な理由をゾロアスター教の教えと祭司の宗教活動にかぎって、特に言語の視点から取り出してきたように、他にもいくつかの理由があり、それらが相互に複雑に絡み合いながらその事態を引き起こしているのであろう。とはいえ、小論が明らかにした事実も見逃すことのできない理由の一つとして、新しくつけ加えられるべきだと思われる。

さらにもう一つの論点は、パーシーは祭司系譜に属する者とそうでない者との間で帰属意識をめぐる少なからぬ緊張をたもってきたことである。つまり、婚姻と養子慣行の調査が明らかにしたように、そこには祭司間の婚姻が強く優先されており、例えばデサイ家とダストゥール家との婚姻と養子が頻出する事実が見出される一方で、平信徒との通婚が書き残された史料からは見出されないことがわかっている。

今後さまざまな機会をとらまえてパーシーのインドへの移動と定着の過程が事実にもとづきながら明確にされる必要があるが、これまでの調査が示唆するところでは、ナウサリにかぎって

えば、祭司系譜に属するパーシーが平信徒との間に或る緊張関係を保ちながら、少なからぬ主導権をにぎって集団の移動と定着を導いていたということはできるであろう。

注

- 1) 拙論 1999 「ゾロアスター教徒パーシーのガーハンバール (gahambar) と新年(No Roz) について」『西日本宗教学会』第 21 号 pp.17-27

パーシーの新年は一定しておらず、年々月日は変わるのであるが、前の年の終わりに祖霊(フラワシ)を迎え、祀り、新しい年の初めに祖霊を送り返すという慣習はペルシアにおいて同じように現在でも保たれている。

- 2) 拙論 1995 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」

『西日本宗教学会』第 18 号 pp.13-25 参照

パーシーは姓名を記憶しようとする思考が強く、姓名が永続的に記憶される種々の仕方を存在させてきている。聖なる火に燃料を加える行為の分担、信託財産制度(Trust トラスト)による聖火殿や鳥葬の塔などの創設、清浄儀礼(Barasnom)の遵守などがその主要なものである。

命名されたものの記憶を死者の記憶の断面で取り出してみると、死者の記憶は、クトゥンプ(父系血縁集団)の規模で死者を記憶する仕方と、クトゥンプの下位集団の規模で死者を記憶する仕方が存在する。前者は男子名だけを記憶し、後者は男女名を記憶する。死者の記憶に関しては、ジンデレワン(zinderavan)の儀礼が行われることがある。これは死後一年間の間になされるべき全ての儀礼を存命中に行うものである。この仕方によっても個の名前は記憶の対象となりうる。

拙論 1995 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」

『西日本宗教学雑誌』第 17 号 pp.1-15 参照。

Disa-Pothi と Vanshavalichopdo の二史料から婚姻の事例を全て抽出し、それをKutumbを単位として分析すると、いとこ婚、natrun, さらに Stur, Cagar, Enoken などの婚姻形態が示すように、パーシーが死者供養とフラヴァシの供養との関連で婚姻を行ってきている側面が明らかになった。

拙論 1984 「ゾロアスター教における聖なる火とパーラク(養子慣行)について」

『西日本宗教学雑誌』第 7 号 pp.78-87 参照。

家族を単位として展開される養子慣行(Palak)の具体的事例の分析によると、養取の場面で父系的因子、長子相続の慣習が色濃く観察され、それがゾロアスター教徒の現実の行動を強く規定している事実が存在する。パーシーの養子慣行は原則として財産相続を伴わず、聖なる火に香木を捧げる行為をとおして死者の霊の供養を行うことを義務とする形態をとる。

- 3) 拙論 2004 「宗教的意味の伝達と変容—ゾロアスター教徒パーシーの祈りを材料として—
『宮崎公立大学人文学部紀要』第12巻第1号 pp.163-188
祭司は祭祀を行う権利を独占する一方で、宗教に関する知識をパーシーの集団全体に教え伝えること、つまり集団内宗教教育を行わなかった。その結果、宗教教育が制度化されず、祈りの意味がゾロアスター教徒にほとんど伝達されてこなかったという事態を引き起こしている。
- 4) 拙論 1983 「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」
『宗教研究』第57巻257 第2輯 pp.81-101 参照。
歴史的に見ると、ノウサリの北約40kmに位置しているスラート (Surat) の方が早くパーシーの移動と定着の拠点となったのであるが、宗教的なこととの関連では、16世紀以降ノウサリが事実上の拠点であった。
- 5) athoran ni tolani Bhagarsath vansavali 1899 p.195
この史料はパーシーのノウサリおよびその周辺地域への移動と定着の様態を解明する上できわめて重要であるが、バガリア祭司という集団に関する史料であるという制約をそなえていることに注意しなければならない。
- 6) Dr.Firoze M.Kotwal 1990 A Brief History of the Parsi Priesthood.
Indo-Iranian Journal 33 PP.165-175
14世紀末から18世紀にかけてノウサリおよびその周辺に移動し定着したパーシー祭司集団の動態に関する基本的事項を簡潔にとらえている。ここでもパーシーおよびパーシー祭司集団においては5大系譜およびその派生系譜が非常に重要な意味をもっていることが指摘されている。
- 7) Dr.Firoze M.Kotwal 1990 op.cit., PP.165-175
- 8) Ervad Rustomji Jamaspji Dastoor Meherjirana 1899
The Genealogy of the Naosari Parsi Priests. pp.1-12
- 9) ibid., p.12
- 10) athoran ni tolani Bhagarsath vansavali 1899 p.195
- 11) 拙論 1997 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なると火集団構造」
『宗教研究』71巻3輯 pp.149-170 参照。
ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火の保持の場面において、ノウサリで最も等級の高い聖なる火アータシュ・ベーラーム (Atas Bahram) のマーチは、祭司系譜を出自とするパーシーが中心となって行われてきていること、個人の断面でも集団の断面でも、祭司系譜を出自とする特定の家族 (姓) が、また、祭司系譜の中でもバガリアー (Bhagarria) と呼ばれる特定の系譜に属する集団が、アータシュ・ベーラームに香木を捧げることによって聖なる火は永続的に燃えつづけてきていることを取り出している。
- 12) athoran ni tolani Bhagarsath vansavali 1899 pp.195
- 13) 拙論 1997 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なると火集団構造」

『宗教研究』 71 卷 3 輯 pp.149-170 参照。

ノウサリの聖火については、香木を捧げる儀礼は祭司系譜に属するパーシーによって、しかもバガリアー祭司に属するパーシーが中心となって行われてきていることに注意しなければならない。

14) athoran ni tolani Bhagarsath vansavali 1899 pp.196-203

15) athoran ni tolani Bhagarsath vansavali 1899 pp.195

16) 拙論 1995 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」

『西日本宗教学雑誌』 第 17 号 pp.1-15

パーシーの養取においては、父系の線をたどる傾向がきわめて強く、兄弟間 59%、父方オジ 15%、父方イトコ 12%となっている。しかもその場合、男子だけの線をたどり、家督などの相続権はもたず、死者の霊を祀るという社会的役割を負っていくという特徴をそなえている。

17) athoran ni tolani Bhagarsath vansavali 1899 pp.195

引用参考文献

Rustom Jamas Dastur Meherjirana

1899 athoran ni tolani Bhagarsath vansavali (バガサ祭司の系譜)

Navsari Bhagarsath Anjuman Committee 1929

1899 The Genealogy of the Naosari Parsi Priests.pp.1-12

Kutar Mahiar Naoroji

1929 navsarinan pak atashbeheram sahebnan navan makanne lagto ahaval

tathateno avak javakno hisab (ノウサリの聖火殿の創設に関する帳簿)

Navsari vadi daremeherman thayala navroni fehrest 1633-1928 A.D. (ノウサリの聖火殿における祭司イニシエーション通過者名簿)

Dr.Firoze M.Kotwal

1990 A Brief History of the Parsi Priesthood.

Indo-Iranian Journal 33 PP.165-175

中別府溫和

1999 「ゾロアスター教徒パーシーのガーハンバール (gahambar) と新年(No Roz)について」

『西日本宗教学会』 第 21 号 pp.17-27

1995 「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と名前の記憶について」

『西日本宗教学会』 第 18 号 pp.13-25

2004 「宗教的意味の伝達と変容—ゾロアスター教徒パーシーの祈りを材料として—」

『宮崎公立大学人文学部紀要』 第 12 卷第 1 号 pp.163-188

- 1983 「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」
『宗教研究』 第57巻257 第2輯 pp.81-101
- 1995 「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」
『西日本宗教学雑誌』 第17号 pp.1-15
- 1984 「ゾロアスター教における聖なる火とパーラク（養子慣行）について」
『西日本宗教学雑誌』 第7号 pp.78-87